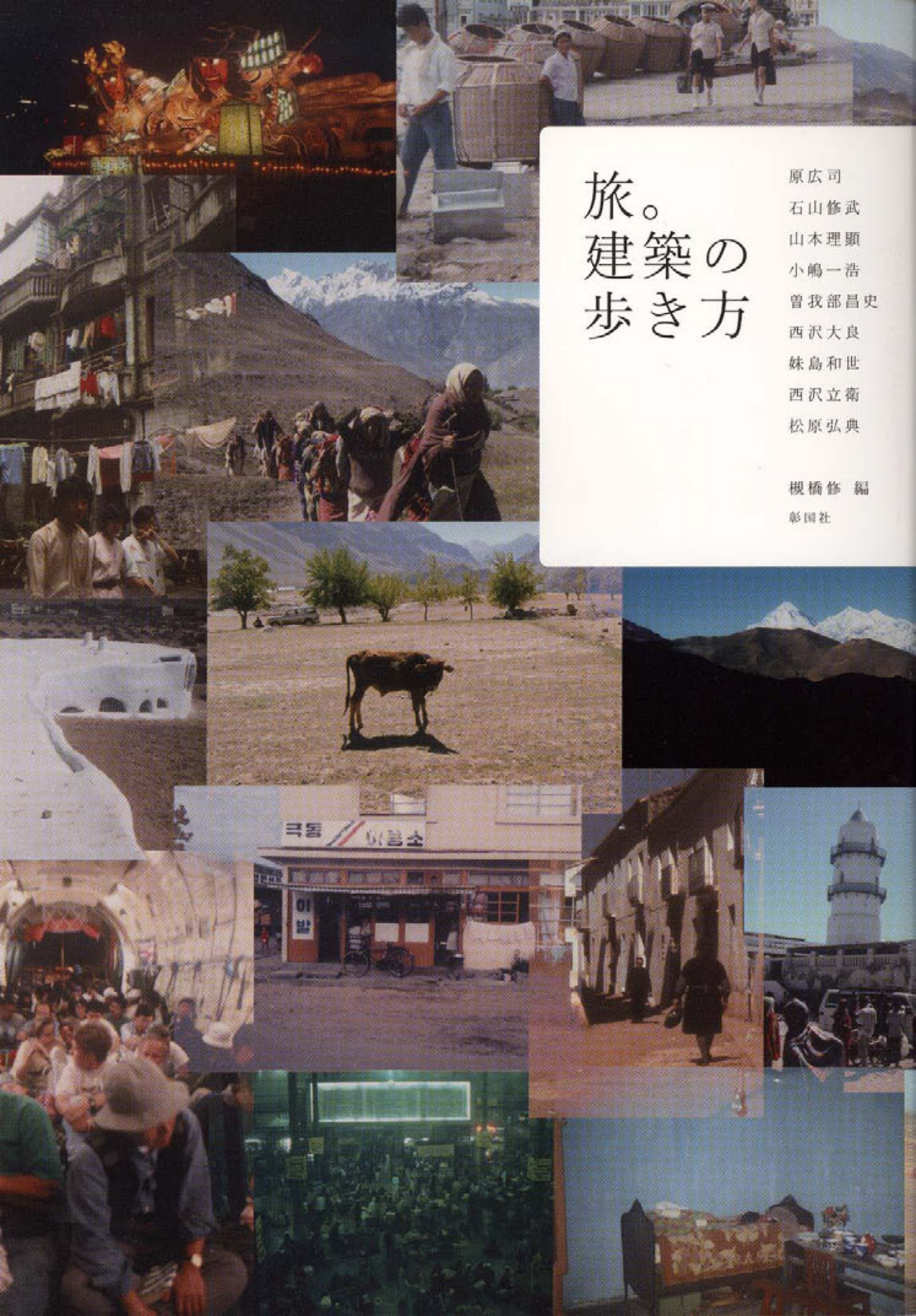

旅。建築の歩き方

原広司
石山修武
山本理顕
小嶋一浩
曽我部昌史
西沢大良
妹島和世
西沢立衛
松原弘典

槻橋修 編

彰国社

はじめに
旅とダイアローグ　槻橋修　006

インタビュー
旅。建築の歩き方
聞き手　槻橋修　藤村龍至　山中新太郎

原広司　010
石山修武　036
山本理顕　066
小嶋一浩　088
曽我部昌史　110
西沢大良　136
妹島和世　164
西沢立衛　182
松原弘典　206
略歴　236

〈付録〉アンケート
22人の「私の旅」
回答者
伊東豊雄　鈴木博之　藤森照信
石田敏明　北山恒　内藤廣　北川原温　鈴木明
小川晋一　石田壽一　高橋晶子　千葉学
宮本佳明　竹内昌義　梅林克　小野田泰明
岡村仁　手塚貴晴　五十嵐太郎　今井公太郎
乾久美子　五十嵐淳

はじめに

旅とダイアローグ

槻橋修

旅の話は愉しい。

見知らぬ土地の美しい風景、その場所のにおいや音、そこに暮らす人々と過ごした時間が、旅人の身体を通して紡ぎ出される。言葉が具体的、直感的であるほど、「彼の地」のイメージは鮮烈に聞き手に伝わってくる。ましてや魅力的な空間をつくり出す建築家ならば、どんな旅の風景を語ってくれるだろうか？　ひょっとすると実際に旅するよりも面白いかもしれない。

本書は、東北工業大学で行われたトークイベントで若い人たち向けに行ったレクチャー「地球の歩き方〜ケンチク編〜」（だべらないと、二〇〇五年九月）がきっかけとなって生まれた。私が東京大学生産技術研究所原・藤井研究室の世界集落調査に参加し、旅を通して建築を学ぶ機会に恵まれたこともあり、これまでの旅のスナップを使って建築を愉しむ旅のすすめを話すという内容だった。延々三時間以上に及ぶレクチャーだったが、話している私自身も、聞いている人たちも、あっという間に時が過ぎたように感じ、あらためて旅の話がもつ独特の面白さを実感した。この体験を編集者と話していたところ、いろんな建築家に旅の話を聞いたら愉しいに違いない、ということになった。

新進気鋭の建築家でよく旅をされている山中新太郎氏、藤村龍至氏に協力を仰ぎ、巨匠から若手まで様々な建築家にいろんな旅の話を聞いてまわることにした。インタビューでは幾つかのトピックを意識して聞くようにした。

1．初めての海外旅行―初めて見に行った建築作品
2．旅のスタイル―仕事や国際会議といった旅の理由や寄り道のしかたなど
3．記録方法―スケッチや写真など、旅先で見た建築をどのように記録するか
4．旅先でのアクシデント
5．これから行ってみたいところ、おすすめの場所

ありふれた質問事項ばかりである。しかし実際にインタビューを始めると話のいたるところに建築家の個性あふれる建築観が滲み出し、話はいつの間にか建築論へ、そして思想へと拡がっていくのだった。まるでこのインタビューひとつひとつが小さな旅のような感覚だ。同じ建築や都市の話でも、それぞれに全く別の風景を語っているようにさえ感じられた。たとえばアルジェリアの集落ガルダイヤには何人もの建築家が訪れているが、ひとつとして同じガルダイヤはない。この世にいくつものガルダイヤが存在しているかのような錯覚を覚えてしまうのだ。この多重性こそ旅のダイアローグがもつ力だと思う。またインタビューした建築家の多くが、旅を通して建築作品のみならず都市から大きな影響を受けている。旅から帰還し、日本の都市をあらためて見ることで、彼ら固有の批評性を獲得しているのだ。旅を重ねているうちに過去の旅が呼び起こされることもあるという。旅の言葉は、建築家たちがそれぞれに辿ってきた「建築という旅」の軌跡でもあると言えるだろう。

旅先での写真やスケッチを多数掲載できたことも本書の大きな魅力となっている。彼らの眼を通して捉えられた風景と現在の彼らの創作活動との間に深い関わりがあることが生き生きと感じられる。その意味では旅のダイアローグが建築論としても読めるようになっている。

ページの都合上、インタビュー数には限りがあるが、より多くの人に旅の話を聞いてみたいと思い、インタビューと並行して日本中の建築家や建築研究者にアンケートを行い、協力していただいた。このアンケート結果も予想をはるかに超える面白さで、後半部分にまとめて掲載した。機会があれば今回聞けなかった方々にも話を聞いてみたいと思う。

本書を読んだらきっと旅に出たくなるだろう。そんな本になったと思っている。

「とりあえず、旅に出よう。帰ってきたら話を聞かせて下さい」

原　もちろん。夕方になったとき、この世のものとは思えない巨大な水晶玉みたいなものが目の前に現れた。信じられないほど感動しましたね。コルビュジエ、ミース、ライト、そのほかにもすばらしい建築家がいて、すさまじい建築があるんだけど、フラーのそれはちょっと世界が違うと思いました。やがて来るであろう未来のすべてが見えるというか……。

槻橋　ドームのなかに街が入っていますよね。

原　そう、電車が走っていましたね。ああいう建築はその後も出ていない。パルテノン、ハギア・ソフィア、ガルダイヤ、離散型集落、それらは宇宙的なわけです。それに匹敵すると思った唯一の近代建築が、このアメリカ館ですね。あれは未来を指し示しています。『二〇〇一年宇宙の旅』が示すようなスペースオデッセイの世界。そのころはまだ人類が月面に降りていないころですが、やがてそうなるだろうという予感を感じさせましたね。ああいう宇宙的な建築をつくりたいと思った。

槻橋　この旅のときには、その何年後かに集落調査をしているとは思っていませんでしたよね。

原　ええ、まったく思いませんでした。でも欧米を旅していると、集落も見たほうがいいんじゃないかという気分になってくるんですね。コルビュジエが見たという中世集落はいったいどういうものか、都市の周縁はどういう構造をもっていて世界風景と

ガルダイヤ（アルジェリア）　1972年

ガンジス川(インド)　1974年

・・・

槻橋　ヨーロッパには、アジアの洗礼を受けてから行かれたんですね。

石山　コルビュジエを見たことがないというのも、ちょっとみっともないことだと思ったんです(笑)。四〇代になるころ、五〇人くらいの旅行団*の団長として行ったのが、初めてのヨーロッパです。

槻橋　ガイドという立場ですか。

石山　ええ、行ったこともないのに建築を説明する立場です。そのときコルビュジエのロンシャン教会堂を初めて見て、つまらない建築だと思いました。失礼な言い方だけど、公衆便所がでかくなっただけじゃないかと。でもそう実感したとき、これは建築家としてプロセスを間違えたとも感じましたね。

　近代建築の名作を見てもそれほどびっくりしなかったんだけど、イェール大学に用事があってアメリカに行ったときにルイス・カーンの建築を見て、恥ずかしいけれど、自分がなめていた現代建築にはとんでもないものがあると感じたんです。これはちゃんと勉強し直さないと大変なことになると。それが、五〇歳になるころじゃないかな。これは強烈な体験でしたね。

*ヨーロッパ建築ゼミナール(第四七回建築視察団、一九八四年)。フランス、イタリア、スペインなどヨーロッパ各国をまわった。

山本理顕

聞き手＝山中新太郎

安全に入れるタイミングがあったら、絶対行ったほうがいいと思いますね。僕らはすごく貧乏旅行だったから現地で苦労しましたけど、お金を払えば飛行機で行けるし、ちゃんとしたホテルもありますから。

山中　一九八二年のラ・ヴィレットのコンペ*は、小嶋さんが修士のころですね。

小嶋　そう。あのコンペはオープンエントリーだったけれど、世界の主要な建築家には招待状が送られていたんです。原さんはそういう手紙を封も切らないでほっぽり出していることが多かったんですが、あるとき「この封筒はなんだろう」と技官と開いてみたら、どうもコンペがあるらしいと。それで修士一年の四人で勝手にスタディをはじめたんです。それを見て原さんも乗ってきた（笑）。

山中　そうだったんですか。あの案は入選しましたよね。

小嶋　はい。原さんと一緒に泊まり込んでやったら、インターナショナルなオープンコンペで選ばれるところまで行った。世界というのは手に届くところにあるんだと思いましたね。ガルダイヤに行った帰りにポンピドゥー・センターに寄って、展示されている自分たちの作品を見たときは感動しました。

・
・
・

＊一九八二年に行われた、パリの大屠殺場跡地を都市公園にするためのチーフデザイナーを決める「ラ・ヴィレット公園」コンペ。一等にベルナール・チュミ案、二等にレム・コールハース案が選ばれた。

ガルダイヤ（アルジェリア）　1982年

ガルダイヤでは
フィクションのなかに
人が住んでいる
という感じがすごくした。

西沢立衛

聞き手＝槻橋修

—— ● 1990年1月～3月

····· ● 2002年10月